二〇一三年一月一五日（参加者一八名）

大樽の箍ゆるびなし寒造り　菜々
冠雪の六甲指呼に灘五郷　〃
寒造り手擦れに光る自在櫂　〃
拳ほどの道具にも名や寒造り　〃
蔵人の膳隔てなき炉端かな　〃
金色の千木にあまつ日春隣　ひかり
句仇も呉越同舟寒の茶屋　〃
宮四温神事を告ぐる大太鼓　〃
神の池へと岩走る寒の水　〃
姦しく鳥語降る森春近し　せいじ
風下に立ちてどんどの灰かぶる　〃
くべられてほむら鎮まるどんどかな　〃
美しく老いたしと思ふ福寿草　宏虎
初空へ前肢上ぐる神馬像　〃
満面の笑みを添へたり福娘　〃
達筆と見えし吉書も灰となる　有香
寒禽の声良くひびく神の森　〃
園児らの黄色い声や吉書揚ぐ　〃
六甲の嶺々の靄ひて雪催ひ　わかば
囀を包容したる宮の森　〃
園児らの頬みなまっ赤とんど燃ゆ　よし子
天日を遮る雲に山眠る　〃
社務所にもゆとりの見えし小正月　小袖
どんど焼き火だるまとなる熊手かな　〃
愛猫もゐて端近に日向ぼこ　百合
冬木の芽朝日を浴びて震へけり　〃
中空へ灰遊泳すどんど焼き　ぽんこ
火かき棒に現るる達筆吉書揚　うつぎ
年男駈けし参道吟行す　こすもす
高舞ひて渇筆しるき吉書揚　かかし
遠巻きに幼なが囲むどんど焚き　よう子
大吟醸のクリームひびの手にやさし　きづな
酒蔵の湯気立ちのぼる初御空　満天
六甲の天辺仄と雪被く　はく子
寒禽の来よもちの実の熟れたるに　〃

定例句会みのる選

二〇一三年一月一五日（参加者一八名）